野沢静証先生を追悼して

大谷大学仏教学会長　小川一乗

野沢静証先生の訃報に接したのは三月に入ってからであった。それによると一月一日のご逝去であった。

先生は、山口益先生の高足の弟子として最も信頼あつき存在であった。先生はすぐれた学問業績を残されたが、その中でも、山口先生との共著である『世親唯識の原典解明』（法蔵館、一九五三）をはじめ、『大乗仏教瑜伽行の研究』（法蔵館、一九五七）に代表される瑜伽行唯識説に対する深い造詣、さらには、中観学派の清弁の学説に対する研究としての「清弁の二諦説」（日本仏教学会年報十八）、「清弁造『中論学心髄の疏・思択炎』訳注――真如智を求める章第三I～K――」（密教文化）などは、後進に今もって大きな教示を与えている不朽の業績である。先生の最後の業績は山口先生への追悼論文として「仏教学セミナー」第二五号に掲げられた「般若灯論釈『諸法不自生』論」であった。

思えば、先生は一筋に恩師山口先生を敬譲し、山口先生もまた先生の人格純真を讃嘆されてやまなかった。私事ながら、山口先生がお亡くなりになったとき、ひとり涙を流し続けておられたのが先生であった。私の手を固く握って葬儀全般について「よろしく頼むよ」と言って下さったその時のお言葉、お姿は、一生忘れることのできない大切な思い出である。私が大学に入ったときには、先生はすでに大学を去られご自坊での学究生活にあったが、山口先生の下で『仏教聖典』（一九七四年に刊行）の編纂事業がはじまったときから、先生の謦咳に接する機会を得て、学問上のご教示を恭くしただけでなく、先生の仏教や学問に対する願心にも触れることができた。私にとって誠に幸せな出遇いであった。

先生は、山口先生の七回忌の追悼法要が大谷大学において勤まったとき、青森からお孫さんに付き添われてわざわざ上洛して下さり、山口先生への追悼法話をして下さった。それが今生でお目にかかった最後であった。その後、ご自坊にて静かに余生を過ごされていた先生は、享年七九歳にして浄土往生された。先生をはるかに偲びつつ、その学恩を謝し、ささやかな弔意を表する次第である。